

# Rio

今月は…タヌキ

## CONTENTS

- 「川の日」ワークショップin矢作川
- 見られることで美しく
- 矢作川流域の万灯まつり
- 今月の一枚

## 「川の日」ワークショップin矢作川

山道省三

「川の日」ワークショップのサブタイトルは、“いい川”“いい川づくり”公開選考会という。このようなサブタイトルがなければ何が何だかさっぱり分からないし、川に詳しい人でさえ「川の日」っていつのこと？と聞いても知る人は少ない。

今年は第8回目として、はじめて東京会場を離れ、豊田市が会場となる。年1回、2日間にわたって行われるこの公開選考会は、7月7日を「川の日」と旧建設省が定めて以来、この時期の土、日曜日に行われる。そこに全国の川で活動する人たちや行政、時として土木関係、環境関係の企業などがそれぞれ自慢の“いい川”“いい川づくり”を持ち寄り、これこそ日本の“いい川”であるぞーとアピールする熱き2日間なのである。そして毎回、グランプリを決め、高額賞金の贈呈に替えて、地元の銘酒一升とか、塩サケ1本が副賞として贈られる。ただそれだけのことにも関わらず、毎年70件ほどの応募と、500人ぐらいの人たちが集まってくる。初めて参加した人の中には、その異様な光景

と興奮につりピーターになる人が多いらしい。

隣国の韓国のNGOは、2001年から参加を始めたが、とうとう自国で韓国「川の日大会」を始めた。

今年は、豊田市の素晴らしい能楽堂やコンサートホールを実行委員会の方で用意をしていただいた。いつもは床に座り込んで大騒ぎをするのに慣れているが、おとなしく上品になりすぎないか、かえって心配である。

さて、毎年“いい川”とは何か？どんな川か？をめぐって議論を戦わすのだが、常にその評価対象が変わっていくので、選考する方も必死に考えざるを得ない。現存の権威はあまり通用しないし、川の専門家の領域をはるかに超える議論に広がり、哲学から文化人類学、都市計画や生態等、幅広い分野と年齢層が集まるところにこの催しの面白さがある。主催者はこの混沌の中にある宝物の発見が目的であり、それを広く共有することによって日本の“いい川”が継承されていくものと信じている。

矢作川は第4回大会（2001年）でグランプリを獲得



第4回 表彰式グランプリ



第7回 二次選考会のようす

した。その賞名は「豊かな川文化の継承、再創造への地域の知恵の結集で賞」(延藤安弘総合コーディネーター)であった。今大会の目的のひとつにその矢作川を体で感じてみたいという人たちが集まってくる。昨年の7月にこれまでの経過を一冊の本に選考員有志がまとめて発刊した(※)。ご参照いただければ幸いである。

※書名：『私たちの“いい川”“いい川づくり”最前線—全国「川の日」ワークショップからの贈り物—』(榊学芸出版社、2004年、「いい川」“いい川づくり”研究会編 (問合せ先：同研究会事務局 03-3408-2466))

(やまみち しょうぞう、  
「川の日」ワークショップ実行委員会 事務局長)

## 見られることで美しく

竹内正美

♪春夏秋冬ドンブラコ～矢作ドンブラコ～♪今日は一緒にドンブラコ～矢作ドンブラコ♪

7月16日から三日間、豊田スタジアムで開催される「祭座ニッポン」の会場外イベント<矢作ドンブラコ>のために作られた歌のサビである。この曲は多くの人たちに踊ってもらうために作った歌で、7月18日の最終日には1,000人近い人が「矢作ドンブラコ～ドンブラコ」と歌い踊る。そしてその踊り手は矢作川の最上流である、岐阜県の上矢作や串原、長野県の根羽、そして北三河の山から三河湾まで、愛知県で矢作川の水を飲料水として飲んでいる24市町村から集まってくる。(蒲郡の人たちは矢作川水系じゃないけど、三河湾に出た水はつながっているから踊りに参加したい...と加わった)

この総踊り「矢作ドンブラコ」の前日、7月17日には矢作水系の20近い市町村から、それぞれの地域で行われている伝統芸能が一堂に会する<矢作伝統芸能フェスティバル>が開かれる。愛知、岐阜、長野の3県をまたぐ矢作川の最上流地域にしかない「廻り太鼓」という全員が叩き手、全員能が踊り手という珍しい、そして最高に楽しい太鼓がある。今回は串原、上矢作、稲武の衆がやってくる。そして旭、「小渡の火祭り」。無伴奏で音頭とりの唄に合わせ踊る、今ではほとんど見る事のない足助、「綾戸の盆踊り」。20人で80本の糸を操り5体の人形が芝居をする知立の「山車からくり」。三河湾沿いの地域に残る「ちゃらぼこ太鼓」などである。これらは矢作川水系の歴史が織り成した、大きな人間文化を伝えてくれる財産である。残念ながら何百年と続いてきたこれらの祭りや芸は、後継者が少なく、まさに絶滅寸前の文化の絶滅危惧種でもある。

今回、「矢作ドンブラコ」という新しい祭りを起こしたいと思ったきっかけは、矢作水系の地域をまわっている内に「川も人も見られないと消えていく」とい

うことを感じたからだ。

それは特に戦後10年くらいから高度経済成長期のたかが30～40年の間におこる、都市化による農山村から都市への人口移動、農林業から工業への移行による大きいと思われる。農林業では自然を「見」、感じながら収穫のプロセスを生きる。そのプロセスは人を「見」ながらの共同作業として行われる。かつては自然を見、人を見、感じることを大切にしていたコミュニケーションが求められたのである。まさに「お互いさま」がキーワードの時代であった。都市化、工業化とは全てが人工の「もの」と自分という関係の中でルーティンを繰り返すもので、見て感じてという感性の幅は極めて狭い暮らしとなった。そして近年の高度情報化社会がそれに被さってきて、自分は一步も動かず来るものを待つ時代になっている。

さて、今回の「矢作ドンブラコ」をきっかけに、矢作川の「水」を頂き生きている人が、遠ざかり遠ざけられた「川」に一步ずつ近づいていくプロセスを、矢作川を神輿みこしに担いだ人の祭りとして共有し、再び積極的に「見る」こと、見られることで美しくなる川作りへ向かうと思いたい。

(たけうち まさみ、だれでもばんぱく協会世話人)



Yahagi DON-BURAKO

# まんとう 矢作川流域の万灯まつり

「万灯まつり」とは、お盆の時期に各地で行われる祭りの一種です。厄病神を追い払ったり、先祖の霊を祭ったり、その動機はさまざま、祭りのやり方も、花火を用いたり、灯籠を用いたりさまざまです。今回は、流域で行われる万灯まつりのうち、川辺で行われるものをふたつ、ご紹介します。

## 藤沢万灯(水神)まつり

梅村源次

藤沢町は、矢作川の中流に位置し阿摺ダムとみどりの山々に囲まれた26戸の静かな集落です。毎年8月15日に夜の矢作川で水神ばやしにのせて提灯と金魚花火が川面を彩る『万灯まつり』が開かれます。このまつりは、材木イカダを下流へ運ぶときこの地が難所で事故が多発するため、水神さまをまつり、怒りを鎮めるため200年ほど前に始まったと言われています。

昭和60年頃は鮎つり舟を3艘ならべ、その上にやぐらを組み提灯で飾り、笛・太鼓を鳴らし、川を上がったり下ったり3回半往復する習わしで、その間、金魚花火・打ち上げ花火・らんたま花火を打ち、夜の川辺が賑わいました。昭和62年舟が転覆する事故がありその後は川にロープを張り舟を固定したり、川の中にやぐらを建てたりしていましたが、平成5年子供たちもおはやしをするようになり、川の中では危険と考え、川岸にやぐらを組み行っています。

水神ばやしは、現在80歳代の人たちは先輩から見よう見まねで引き継いできましたが、平成元年、後藤多朗先生に譜面に置き換えていただき、以降学校教育にも取り入れて子供たちに継承しています。また40歳代の人たちも平成13年から子供たちに負けなようにと練習し参加するようになりました。今では親子、孫と3代そろって演奏される家族もあります。

自治区ではボランティアで水神ロード愛護会を結成し、矢作川の自然保全活動をし、『万灯まつり』に備えています。今年も8月15日午後6時より『万灯まつり』を開催いたします。夜の矢作川絵巻をご堪能下さい。  
(うめむら げんじ、藤沢区長)



## 足助川万灯まつりに想う

松井栄子

賑やかだった蝉時雨がやみ、日も落ちて夕闇の迫る頃、足助川沿いに並べられたろうそくに灯が入ります。回を重ね、今年11回目を迎える足助川万灯まつり。そうか、あれからもう10年、時の経つのがとても早く感じられますが、私には、このまつりに特別な想いがあります。

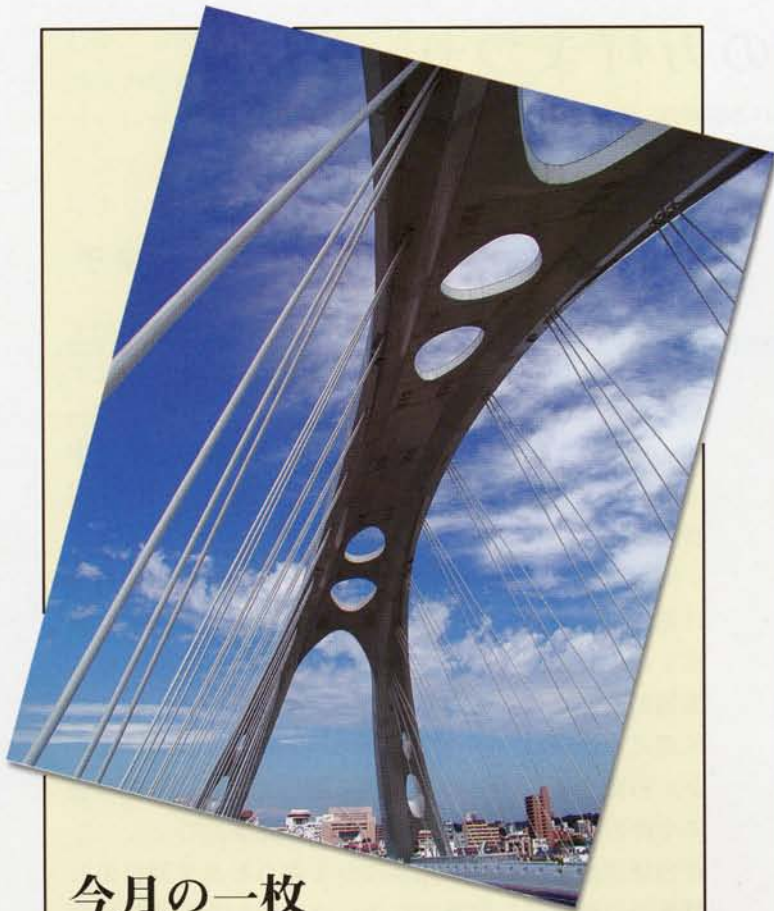
町並みに沿った足助川の遊歩道が整備され、紙屋淵に埋もれていた無縁仏の供養に六地藏公園が造られ整備されました。当時足助町の行政に関わっておられた大河原静臣氏は、この無縁仏を供養しようと、親しい仲間（きよみ）に声を掛け、ろうそくでの万灯を思いつかれました。自費を投じ、こつこつと準備しておられた姿がまるで昨日のこのように思い出されます。

翌年、病に倒れ、楽しみにしておられた2回目の万灯まつりを目前に他界されてしまいました。ゆるやかな曲線を描きゆらゆらと揺れるろうそくの灯、とりわけこの年は、まるでこのまま天国へと続いているかのようでした。大河原氏の想いは、観光協会に受け継がれ、そして地元住民参加のイベントへと移行し、今日に至っています。例年8月14日は夕立によく遭い、改めて大河原氏を偲び、仲間と語り合う機会でもあります。

夕涼みや湯上がりの親子連れが、また、若者たちが、石畳の遊歩道をそぞろ歩きます。とうとうと流れる足助川に感謝しろうそくの消える頃、思い思い家路につくのです。そして足助の町並みに静寂が戻ってきます。そう、10年前と変わることなく、そしてこれからも続けられていくことを願っています。

(まつい えいこ、足助観光協会)





## 今月の一枚

photo by A. Shiragane 豊田大橋 (2002/7/16)

## 「矢作川流域の昆虫展」と 矢作川研究所の紹介を行いました！

八草駅インフォメーションプラザにて、5月30日～6月5日の間、展示を行いました。6月5日には、山本研究員が矢作川の概要を発表いたしました。



## 編集後記

今回は川にかかわる催しをとりあげました。昔から伝わる信仰的な水神祭から、イベントに至るまで多様な関わり方のある今日ですが、やはり人は古くから川とつながりを持ち、そしてこれからも関わっていくものと思います。そのような川を将来に引き継ぐことが、私たちの大切な使命ではないでしょうか。ところで、私の個人的なビッグイベントとして6月18日に待ちに待った鮎漁が解禁しました。喜び勇んで川へ行きましたが、技術不足も手伝って期待はずれの釣果となってしまいました…残念！（宮）

## 「川の日」ワークショップ in 矢作川のお知らせ

“いい川”って何だろう？…みんなで“いい川”を持ち寄り、それぞれの川の「タカラモノ」に光を当て、「“いい川” “いい川づくり” とは何か」を探ります。

7/16 13:00～16:00

全体集会、一次選考

7/17 9:00～15:30

二次選考、公開討論会

豊田参合館（メイン会場）ほか

## 携帯用サイトつくりました！

矢作川流域の壁紙がダウンロードいただけます。



<http://www.city.toyota.aichi.jp/yahagi/i/>



## 豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19

豊田市職員会館1F

T E L 0565-34-6860

F A X 0565-34-6028

e-mail [yahagi@hm.aitai.ne.jp](mailto:yahagi@hm.aitai.ne.jp)

**R100**  
再生紙を使用しています